

シマ育の ススメ

続・子どもは島で育てたい

リトケイではこの秋、姉妹メディア『シマ育コミュニティ』をスタートしました。「シマ育」とは、互いに支え合える地域共生社会(=シマ)にある人・自然・文化の中で人間力を育むという意味の造語です。

半世紀前までは、日本各地の子どもたちがそうした環境のもとでたくましく育っていました。しかし時代は移り、今や多くの子どもたちが自然とも、地域とも、交わりにくい環境で育っています。

一方、離島地域では今も「シマ育」はめずらしいものではありません。なぜなら、海に隔てられる島々には固有の文化が残りやすいから。

この特集では、そんな島々が誇る大きな魅力「シマ育」について有識者・地域・子ども・親の視点から考えます。



編集・ritokei編集部

人が育つ環境としての島という可能性

自然があり、文化があり、人がいる「シマ育」の土台となる環境は、島の人にとっては当たり前かもしれませんが、そんな環境が今、人間が育つ場として大きな可能性を秘めているのではないかと、という問いをもとに、保育学や教育学の研究者として知られる汐見稔幸先生と、子どもたちの自然体験を支えてきた中能孝則先生に聞きました。

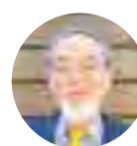
社会で求められる暮らし力「非認知的能力」とは？

人間が育つ場としての島の可能性を論じる前に、汐見先生はまず社会で求められる「能力」について口火をきった。「Googleがどういう能力を持った人が良い仕事をしているかを独自に調査したところ、地位や給料の高い優秀な人が持っていた能力は、学力ではありませんでした。人工知能をつくれるような

理科系知識よりも、チーム力やリーダーシップ力、人を励ますのが上手いとか、上手に失敗する力など、学力では身につかないスキルだったのです。こうした能力は「非認知的能力」とも呼ばれ、学校教育で習得できる「認知能力」とは反対に、学校で身につけることができない能力としても知られている。非認知的能力はもともと、「人間が社会を営むための能力は学力なのだろうか?」という問いをもとに、

1960年代から米国で行われてきた研究で明らかにされた能力だ。その実験では、3~4歳の子どもたちを対象に、子どもたちの能動性を重視した丁寧な保育を行ったグループと、そうでないグループを長期間に渡り比較。その結果、学力の差は生まれなかったが、子どもたちが40歳になった頃、月給や持ち家、生活保護非受給などで差がついた。能動性を重視した保育を受けた子どもたちは、自ら工夫して

遊ぶ体験や、もっとおもしろくしようとする挑戦、できないときに相談する、簡単にあきらめないという経験を積んでいた。そうした力が、社会に出た時に誠実に生きる能力として発揮されたのだ。この能力を汐見先生は「暮らし力」とも表現する。「昔の人はクーラーも冷蔵庫もない生活をしていました。ないからこそ工夫する。クリエイティビティを発揮し、人に頼り、人と協力する。自然にさからわず、



汐見稔幸(しおみ・としゆき)
(一社)家族・保育デザイン研究所 代表理事。東京大学名誉教授・白梅学園大学名誉学長・全国保育士養成協議会会長。日本保育学会理事(前会長)。専門は教育学、教育人間学、保育学、育児学。自身も3人の子どもの育児を経験。保育者による本書の交流雑誌「エデュカール」編集長でもある。持続可能性をキーワードとする保育者のための学びの場「くうたら村」村長。NHK Eテレ「すくすく子育て」など出演中。



中能孝則(なかの・たかのり)
鹿児島県薩摩川内市生まれ。15歳まで離島で過ごす。1974年、(公財)社会教育協会日野社会教育センターに勤務。元館長。2009年より「森のようちえん&冒険学校」を立ち上げ、企画・運営に携わる。NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟運営。

島での子ども時代に楽しかったこと

非認知的能力が育つ体験にはどのようなものがあるのでしょうか。かつて島の子どもだったリトケイ読者に聞きました。

浜で遊んだり、港で釣りしたり、おもしろかった

いつも海が近くにあって、観光が盛んだったので外国人やあらゆる世代の人たちと日頃からコミュニケーションできた

星が素晴らしいので小さい頃は天文学者になりました

祖父が漁師のため小学生からウニをきっていました

夕方、皆で浜に出て流木などのごみを集めて焚き火をして、海を眺めながら話したり、騒いだりするのが、夏の楽しみでした

夏休みは、山にクワガタを捕りに行ったり海へ泳ぎに行ったりして外遊びばかりでした。2回海につけるだけでもバケツいっぱい自然を遊び場にしていたように思う

秋になると小イワシの大群が入りこみ、昆虫を捕まえる子ども用の網でも、2回海につけるだけでもバケツいっぱい自然を遊び場にしていたように思う

釣りや磯遊び、山菜採り、昆虫採集など、自然を相手にやりたい放題だった。たらいに海水を張って石や砂を入れ、磯で捕まえたカニやヤドカリを自宅で飼っていた



自然を上手に利用しながら、自然に感謝をし、自然からいろんなものもいただく。そして生活をやりくりできる力を身に付けていたのです。離島の人は、台風で船が来なくなっても、1週間くらいはやりくりができたりますが、Googleでもそういう能力を持っている人が良い仕事をしていただけです。

不便だからこそ得られた 知恵や工夫の経験

1950年代、産業の発達に伴う都市化により、子どもたちと自然との関わりが不足したデンマークでは、自然のなかで保育を行う「森のようちえん」が生まれ、国中に広がっていった。1974年から東京のひの社会教育センターで野外活動や自然学校の企画運営に携わってきた中能先生は、デンマークの保育環境に衝撃を受け、日本の子どもたちに自然体験を提供する「森のようちえん&冒険学校」も展開してきた。

ドイツの研究では、森のようちえんに通う園児と一般幼稚園児を比較すると、前者の方が高いコミュニケーション能力を持っていたという結果も出ている。そんな森のようちえんを推進する中能先生の原点には、15歳まで過ごした瓶島での記憶があるという。「子どもの頃は、自然の中で大好きな兄ちゃんと遊びほらしていました。かごとナイフを持って山芋を掘りに行ったり、竹を切って蠟で油抜きをしし歪みを直

しながら魚釣りの竿をつくったり。兄ちゃんは竹を切るのに「そのノコじゃ切らん方がいい。目の小さいノコがいい」と教えてくれ、ナイフの研ぎ方も教えてくれました。リールの付いた竿はあこがれてましたが、自分でつくった竿は何年も大事に持っていて、自分の誇りになりましたね」(中能先生)

刃物を扱うなかでは少々切り傷も生まれるが、きちんと手入れされた道具を使うことがリスクマネジメントになることも、遊びの場で学んできた。「山で採ってきた山芋を見て母は『おかずが一品増えたね』と喜んでくれました。遊びのなかで得たもので家族が喜んでくれるし、自分も家族の一員だと感じられて誇りがあったですね」。

当時、昼間は電気も通っていなかった瓶島の暮らしはお世辞にも「便利」とは言えなかったが、そんな暮らしこそが非認知的能力を高めるのだと汐見先生は言う。「不便な環境で、頭を使いながら暮らしを豊かにするための方法を努力して身につける。昔の人はそうやって自然と非認知的能力を養うことができていたのです。けれど今の生活ニケーション能力を持っていたという結果も出ている。そんな森のようちえんを推進する中能先生の原点には、15歳まで過ごした瓶島での記憶があるという。「子どもの頃は、自然の中で大好きな兄ちゃんと遊びほらしていました。かごとナイフを持って山芋を掘りに行ったり、竹を切って蠟で油抜きをしし歪みを直



1 瓶島の海でエビを捕まえる子ども。今も島には自由に遊べる環境がある
2 トカラ列島・宝島で暮らす子どもたち。大自然の中で多様な学びを得ている(提供・本名一竹)



3 60年前の瓶島の風景。家族総出で甘草海藻を採りに出かけ、子どもたちは海遊びを楽しんだ(提供・中能孝則)

子どもたちがいろいろな力を見つける場になりうるのです」(汐見先生)

子どもが自然に学ぶために 必要な大人の姿勢

豊かな自然があるとはいえ、近年は子どもたちが自然の中で自由に遊ぶ姿が減りつつあり、親自身が自然との関わりになじめない場合もある。島という利点を生かし、子どもたちが非認知的能力や暮らし力を身につけるにはどうすればよいか。

まず大事なことは「大人が必要以上に口を出さない」こと。「大人には見守る力をもってほしいですね。子どもは親が近寄ってくると、親を気にして動いてしまいます。お父さんお母さんのことを気にせず、子どもが心の動くままに自由に動く距離があるのです」(中能先生)

ケガをしないよう大人は子どもに「危ない」と声を掛ける。その時、大怪我をするほどの危険か、そうでないかを見極める力を身につけるのが大人の仕事なのだ中能先生。子ども時代、海で離岸流に流された経験があったから「これ以上は危ない」という限界を学ぶことができた自身の経験もふまえて「自然のなかでの遊びは、自分の限界を知るチャンスでもある」という。

汐見先生も子どもたちの能動的な動きを尊重してほしいという。「同じ環境の中でも子どもたちは十人十色の関心を示します。その子が何に興味があり何を伸ばしていきたいのかを見て、最低限の安全の指示をしなが、それ以上はかまいません。子どもを信じて、ルールやプログラムを考えすぎないことです」(汐見先生)

つくるよりも買うことが当たり前と

いう消費生活への慣れと同様に、ルールやプログラムを与えられることに慣れた子どもたちは、何も無い環境で遊びをつくることに不慣れだ。自然体験を求めて中能先生のもとへやってくる子どもたちのなかには、最初は「何をやるの?」と受け身の姿勢が目立ち、保護者も「プログラムはなんですか?」と尋ねてくる人もいた。しかし、非認知的能力や暮らし力は与えられたものではなく、自ら考え、つくり出すからこそ養われる。不便や不足を肯定してこそ得られるものなのだ。

環境に恵まれた島を、子どもたちがたくましく育つ場として十分に生かすためには、大人たちの「見守り力」がカギをにぎる。「島には都会にはない自然環境がたくさんあります。そんな豊かな環境を活かしていきたいですね」(中能先生)

島の自然や文化、地域社会の中でたくましく育つことのできる「シマ育」は島に暮らす子どもだけでなく、家族旅行や学習機会などでの体験や、離島留学制度、子育て移住など、さまざまな門戸が開かれている。汐見先生曰く、非認知的能力を育む年齢は早ければ早い方が良いものだが、現代的な暮らしでは習得できなくなった能力を高める機会は年齢問わず貴重なものだろう。「離島にはちょうどいい規模のコミュニティがあり、コンピニもあんまりないから自分でつくるしかない。自然と上手に関わることが都会ではほとんどできなくなってきているが、自然は心の豊かさを経験させてくれる。人生の一時期だけでも、そういう場所で過ごすことは、子どもにとって大切な財産を与えてあげることだと思います」(汐見先生)



(上)ビルやマンションが立ち並ぶ東京都心の風景
(下)都会の公園で遊ぶ子ども



生きることの実感と人間を学べる島

地域の子育て環境は、それぞれに環境に適合したかたちでできあがります。多良間島の「守姉」(※1)が生まれた背景には、人頭税に苦しめられた時代の、昼間は両親ともにずっと畑に出て、帰っても寝るまで布を織るような厳しい暮らしがありました。そこで、子育てをみんなサポートしあうアロマザリング(※2)が発達し、むしろ人間にとって望ましいソーシャルキャピタルとなったのです。それは「乏しさは豊かさだ」ともいえる幸せなことでした。

小さな島では、人が生きて、愛して、病気になる、死んでというすべてや、政治や経済、学校、警察、老人施設などのすべてを一望できます。人間の生き方の全貌が見え、「人間ってこうだよ」ということも学ばせてもらえますが、都会にはそれがありません。都会の人間は役割行動をとっているだけで、人間的な部分が見えず、生きる実感が得ら

島と都会の親子はクマノミとイソギンチャクのように

2020年発行のリトケイ特集「子どもは島で育てたい」で、沖縄・多良間島の共同養育文化やアロマザリングの重要性を紹介した発達心理学者・根ヶ山光一先生に、改めて子育て環境としての島の価値について聞きました。



根ヶ山光一(ねがやま・こういち) 発達心理学者。早稲田大学名誉教授。専門は発達行動学。NPO法人保育・子育てアドバイザー協会理事長や乳幼児医学・心理学会理事長も職務。著書に「アロマザリングの島の子もたち-多良間島子別れフィールドノート」(新曜社)など

れる環境も失われているのです。

島と都会の親子は相互利益になれるように

都会生活はすごくきれいで美しく、整っていて気持ちが良いのですが、その気持ちよさは人工的なもの。実際の世界には、もっと暑かったり、寒かったり、臭かったりという基礎感覚があります。

身体の痛みとか痒さを感じさせないよう、負荷を取り除くことが快適であり、幸せだと思われていますが、それでは身体は無能化されてしまいます。汗をかいたり、震えたり、身体を使って生きているという実感を遠ざけてしまうのです。人間は怠惰なので不快をつい遠ざげようとしてしましますが、そればかりを求め続けている良いのでしょうか？

島の人々のなかには、島の暮らしを否定する人もいます。かつては生活が貧しく、命がけで海を渡っていた時代もあったので、都会生活に魅力を感じる選択も否定はで

きません。しかしその先にある都会では、身体を無能化させるような環境がつくられていて、行政も結果的にそうした社会の仕組みをつくってきたわけです。

島にはきれいな空気や自然があります。水のなかで泳いだり、風に当たったり、身体を使って生きるよろこびや、その実感を得ることができるところなのです。

「シマ育」で島と都会の親子がつながるにしても、島の過疎を止めるだけに行われることではないと思います。自然を求めてやってくる都会の親子と、クマノミとイソギンチャクのように相互に利益を与える関係になるといいですね。

子どもの集団と地域の真ん中にリリース

都会の保育園で子どもたちの観察をしても、5歳くらいの子どもは園児同士で小さい子の保育をしています。子どもは子ども同士のネットワークのなかで、相互調整しなが



(上)子どもたちも活躍する多良間島の豊年祭「八月踊り」
(下)トカラ列島・宝島で行われる水泳の授業



ら自律的に付き合い方を編み出していくのです。

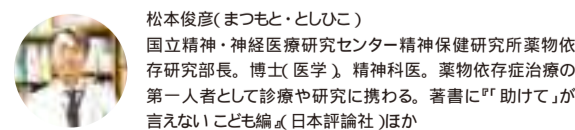
ですから、島で都会の子どもたちを受け入れる場合にも、大人が受け入れ、プログラムをつくるのではなく、子どもの集団に投げ入れ、そこで関係を調整するのがよいでしょう。子どもには残酷な面もときにはありますが、今日喧嘩しても明日仲良くできるような、大人とは違う付き合い方ができます。

こども家庭庁の方針には「こどもは家庭で見るのが一番」というベースがありますが、僕は研究者として反対しています。「こどもまんなか社会」では、子どもは家庭の真ん中ではなく、社会の真ん中に置く必要があるのです。子育ては地域で行い、地域に子どもをリリースする。そうするとたまにケガをするようなことも起こりますが、それを拒否せずに認める。親がそうした度量を持つことが大切なのです。

1 血縁関係のない間柄、もしくは遠縁の少女が小さな子どもの世話役になる多良間島の風習
2 以外の人が子育てに積極的に関わること

精神科医の視点で見るこの国の子どもたち

島に限らず日本の子どもたちの日常には、スマートフォンやオンラインコンテンツがあふれるようになりました。2020年から続いたコロナ禍の影響も含め、日本の子どもたちがどんな状態にあるのか。子どもの問題にも詳しい精神科医の松本俊彦先生に聞きました。



松本俊彦(まつもと・としひこ) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部長。博士(医学)。精神科医。薬物依存症治療の第一人者として診療や研究に携わる。著書に「助けて」が言えない子どもたち(日本評論社)ほか

Q 精神科医の視点からみた日本の子どもたちが抱える問題とは？

あくまで診察室からの推測ですが、学校と家以外のたまり場がなくなっている印象です。都会では地域コミュニティが崩壊し、隣に誰が住んでいるかも分からず、親族との関わりも少なくなっています。コロナ禍によって遊ぶ機会にはさらに失われ、残された空間はスマートフォンの中だけ。孤立した子の一部は歌舞伎町の「トキ横」などに流れていきます。そこには薬物や売春などの危険があるのですが、一方で子どもたちがホームレスの老人たちと会話する風景がみられる。コミュニティに飢えていて、自分の価値を再認識できる場所を求めているようにみえます。コロナ禍では皆でテーブルを囲みごはんを食べる機会も失われましたが、これほど大切な儀式はありませんでした。デジタルに感染リスクはありませんが、感染リスクを犯さずに信頼関係を結ぶことはできないのです。

Q スマホやインターネットの良い面は？

追い詰められた人が救われる可能性があります。30年前だと引きこもりの人は永久に引きこもりましたが、最近はオンラインゲームで友だちができ、恋人ができ、結婚できる人もいます。ゲーム依存などのトラブルもありますが、もはやスマートフォンなしの社会に戻れないのであれば、必要悪としてスマホを使い倒すことの方が、サバイバル力につながる可能性があります。

Q 反対によくはない面は？

リアルな人間関係が乏しかったり不確かな子ほど、スマホにのめり込んでしまいます。コミュニケーションにおいては、リアルな場数を踏んでいないと、自分の言葉が相手をどれほど傷つけるのかわかりませんし、相手を評価する価値観も育ちません。SNS上ではエコーチェンバー効果(※)で錯覚を起こすおそれもあり、猜疑的になったり、裏を探ったり、コミュニケーションに疲れてしまいます。

※自分と似た興味関心をもつユーザーをフォローする結果、意見をSNSで発信すると自分と似た意見が返ってくるという状況を、閉じた小部屋で音が反響する物理現象に例えたもの

Q オンラインコンテンツに慣れることの弊害は？

オンラインコンテンツは非常に短い時間でインパクトをもたらします。YouTube動画よりも短いTikTok動画を好むように「即時報酬」に慣れると、辛抱ができなくなってしまいます。長く思考しながら得るよろこびや感動はインパクトが弱いのです。また、未来に受け取れる大きな金額と、すぐ目の前の少ない金額とでは、衝動的な人ほど目の前の金額を選んできてしまいがちになります。即時報酬を超えるのは簡単ではありませんが、我慢すればあとで大きなよろこびが得られるということを学ぶには、やはり教育が必要です。

Q 都市部の子どもたちが島で過ごす意味は？

子どものうちに定期的なデトックスとして、島のような空間で過ごすことは、自然なよろこびを経験する良い機会になり、人間そのものを学ぶ機会にもなるでしょう。本来、人間とは複雑なもので「一部」を切り取ったSNSの世界には、人間そのものを学ぶ機会はありません。リアルなコミュニケーションを体感できる世界では、人間の矛盾や奥行きを感じることもできるでしょう。

Q 子どもたちにとって地域の重要性は？

子どもたちは虐待を受けるなどの不適切な環境で育つと「世の中はこうだ」「大人はみんなこうだ」と、過度な一般化を起こしてしまいます。そこで多様な大人と交流できる地域コミュニティがあると、親には否定されても自分を認めてくれる別の大人がいるという体験ができる。「うちの親とは違うタイプの大人がいるんだ」「自分の親も完璧ではないのだ」と、健全な脱・錯覚ができるのです。

読者に聞いた島の育ての魅力と課題

実際に島で子どもを育てる親はどんなことに課題を感じ、魅力を感じているのでしょうか。リトケイ読者に聞きました。

留学制度があるが、来たいと思う「子どもの気持ち」、経験して欲しい「親の気持ち」、そして受け入れる行政、地域、里親とかかわるすべての「子どもたちへの環境づくり」に関する考え方を大きく見直すべきであり、制度に取り組むすべての地域のよき事例等をリサーチして自分たちへの地域に反映させる。そして実現していく。大きな課題であります。

(未来へ)

人が温かく、じいばあばが子どもと歩いているといつも話しかけてくれて娘を可愛がってくれるところです。また、自然豊かな場所で子どもを育てられるのは子どもだけじゃなく親の精神的な安定にもつながる気がします。

(こく)

地域の目があるから安心して子育てができた。

(ぼぶん)

子どもの皮膚科の通院が大変。日帰りができないので、一泊せざるを得ない。

(よーよー)

自然が身近にある。地域の大人が子どもを見守る文化がある。子ども本人やその友達の親の仕事姿を見る機会が多い。コミュニティが小さいため、意思があれば10代前半から社会参加が可能。

(うりぼう)

近所のお年寄りたちがとても大切にしてくれます。「子どもがうるさくてすみません」と言うと「子どもの声が聞こえてくるのは嬉しいよ」と言ってくれます。

(かずえ)

ファミサポ制度がない。夕方～夜にかけて、親の帰りが遅い時や、習い事に行かせたい時に、支援がないので、お姑さん頼りになってしまうが、お姑さんにも都合があるので毎回という訳にはいかず、結局自分が予定を諦めたり、無理をしたりすることになる。

(瀬戸猫なみ)

島で子育てをしてよかったこと

コミュニティが小さいので保護者同士が助け合いやすい。多世代の方に一緒に育ててもらえる。

(さえ)

遊びは島の環境に合わせて選ぶことができる。スポーツを好む子どもたちでは存分に活動でき結果も出せたのは環境や文化があったからだと思う。

(未来へ)

島の子育てで感じた課題

どこまで都市部と同じことをさせるかさせないかの線引きが難しいと日々思っています。せっかく島で暮らしているからその経験をさせてあげたい一方で、情報があふれているため、都市部の子どもと同じようなことをしたがる欲求も抑えられない(具体的には動画サイトに没頭するなど)。

(0.07オンス)

どこにでも子連れで行ける。島の大人や子ども(小中学生)が自然と子どもの面倒を見てくれる。人は疑うものという概念が薄く、人は信頼に足るものである。私は見守られているという認識をつくりやすい。

(いしおのヨメ)

自然があふれ、豊かな感性が育まれるのではないかと思います。

(カル・リブケンJr)

島の中に、島の子育てが良いと思っている層と、課題にばかり目がいつている層が混在しており、その2者が分り合うことが難しいこと。

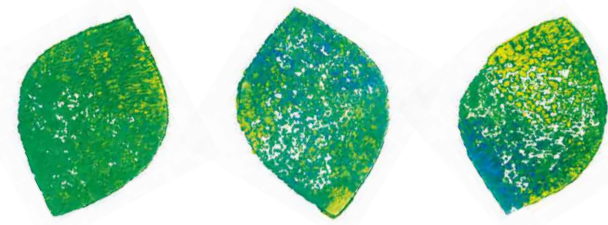
(もきち)

子どもが病気がかった時の医療資源の乏しさ。

(カル・リブケンJr)

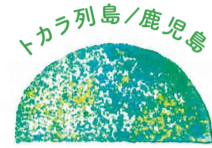
都会と対極の環境を体験することで多様な価値観を育めよう。自然の中でたくましく育ちそう。

(しま彦)



子どもを育む島々の

島とゆかりがある人も、今はつながりのない人も、シマ育を体験できる方法のひとつに留学制度があります。



7島すべてが育みの場 島への想いは世代を巡る

南北160キロメートルに人口60～150人の有人島7島が連なる十島村は、1991年に留学制度をスタート。留学生は7島のいずれかに振り分けられ、累計529人が島で学んできた。2017年からは寮の整備に注力。現在は口之島、諏訪之瀬島、平島、悪石島、小宝島に寮があり、2025年には全島に揃う予定だ。

2023年に完成した小宝島の寮

では、小中学生7人が暮らす。寮監の齊藤^{ひかる}星さんはかつての留学生。弟と共に親戚宅で小学6年から中学3年までを過ごした。牧場から水を汲んで一輪車で運ぶ。そんな少年時代を齊藤さんは「人生の中で大きな体験」と振り返る。昨年、寮ができることを知り、妻の後押しもあって5歳の息子と3人で移住。2度目の小宝島生活が始

まった。齊藤夫妻は「怒られるのを分かっているながら毎日ふざけている子どもたちを見るのがすごく楽しい」と笑う。ひとり息子もすっかりみんなに愛される弟に。「自分が小宝島で過ごした時間を子どもたちにも体験してほしい。卒業後も遊びに来てくれたら」という齊藤さんは、留学生たちにかつての自分の姿を重ねている。

2022年に完成した悪石島の寮は、校庭を挟み学校に見守られるように建っている。中学生4人が暮らし、レニエール志穂さんと、夫でフランス出身のブノワさんが寮

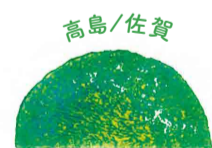
監を務める。「小さなコミュニティで暮らしたい」と探しつけた理想が十島村だった。1年半後の移住を考えていたが、里親への興味を知った教育長から「寮監になってほしい」と声が掛かり、半年後に繰り上げた。

寮則には「スマホは平日夕食後に30分」「外出時には誰とどこへ行きいつ帰るのか伝える」などのルールが並ぶ。「島立ちする15歳までに自立の基礎は身につけてほしい」と話す志穂さん。その視線の先は常に子どもたちの将来を見据えている。

宝島では島生まれの保育士・牧口優花さんが活躍している。同級生はいなかったが、森・海・鍾乳洞を冒険しながら宝島の自然と人への愛着を育んだ。

奄美大島で過ごした高校時代に「宝島に保育園ができる」と知り、保育士になることを決意。東京で学び、3年前に保育士として島に帰った。牧口さんが愛した島の自然は保育にも生きている。クレパスで葉脈をなぞったり、スキでミミズをつくったり。来年の春には、自身も母となる。絶海の島々に、子どもたちの声がかすます響き渡る。

①小宝島の寮監・齊藤家と寮生たち。子どもたちは秋田や静岡など全国から集う②地域からの信用が厚い小宝島小中学校の東教頭先生とご家族③片手で数えるほどの机が並ぶ小宝島小中学校の教室④週2回ある小宝島の通船作業は島民自らの手で行う⑤悪石島の寮監・レニエール志穂さん。寮にはフランスの調度品が多い⑥島に帰るため保育士に。宝島の牧口優花さん



元・島っ子の寮母は児童教育30年 愛された経験があれば頑張れる

唐津市の島の代表でつくるからつ七つの島活性化協議会では、「からつ七つの島宝探し留学」を掲げ市内の有人離島7島のうち馬渡島、加唐島、小川島、高島で離

島留学を受け入れている。約190人が暮らす高島では、小学生たちが寮で暮らしながら学校に通っている。2023年度から寮母となった新小

高島の「大人も子どもも下の名前前で呼び合うところが好き」という新小田さんは、個人が尊重されることは、子どもの成長にとっても大切だと考える。都会のように習い事ができなくて

も、それ以上に学ぶ機会は盛りだくさん。寮生の自転車がパンクした時はYouTubeを見ながら一緒に修理した。島は不便の数だけ成長できる。

新小田さん自身にも、島の子どものとして天草で10年過ごした記憶がある。「島でみんなに愛されたという経験があれば、何があっても乗り越えられる」。その言葉には経験に裏打ちされた説得力が宿る。

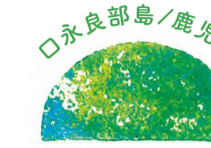
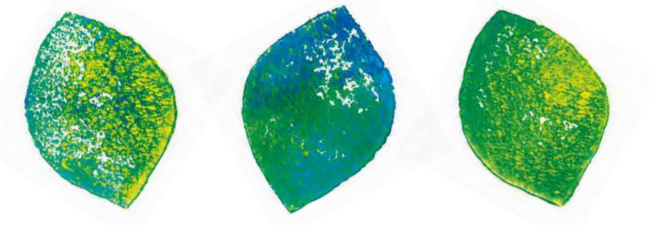
高島では児童が病気等になった場合に保護者が迎えにくることのできるエリアからのみ留学生を受け入れています

①唐津市街地から車で10分の高島にある唐津市立高島小学校②福岡出身の新小田さん。縁あって高島の寮母となった



いろとりどりのシマ育

その仕組みは島によってさまざま。どのような環境で子どもたちは育っているのか。とりまく人の声を紹介します。



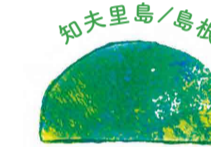
留学生も縁故者も留学制度が 「帰ってくる」きっかけに

口永良部島では1996年から留学生を受け入れてきた。20年以上里親をしてきたという貴船真木さんは、その経験を振り返り「実親とのコミュニケーションがとれていること

が大事」だと語る。最も厄介なのは「隠す」こと。抱えた問題が伝えられないまま預かった子どもは、結果としてトラブルを起こし留学も続けられなかったという。



①里親経験20年の「民宿くちのえらぶ」貴船真木さんと裕子さん②森西さん親子。親子留学で利用できる家は学校の隣にある③活火山がそびえる口永良部島は屋久島町に属する島



若きハウスマスターチームが 留学生のチャレンジをサポート

人口約600人の知夫村は2017年に離島留学をスタートした。受け入れは全国の事例を調査し、長所・短所を見極めた上で寮方式を選択。学校近くの旧集会所を寮として改装し、受け入れがはじまった。

特徴は若きハウスマスター(HM)たちの「チーム体制」。小6～中3まで6名の留学生が寝食を共にする寮生活は、2023年度は4名のHMと1名のインターン生、教育委員会スタッフ、調理員さんの中



①HMは地域おこし協力隊やインターン制度を活用し村が採用②20代のお兄さんお姉さん世代が子どもたちを元気にフォロー③留学生もHMチームも地域の人々に支えられている

心とした地域の方々によって支えられている。コーディネーターの竹村ふみさんは「交代で寮に泊まりながら生活に寄り添ったり、子どもたちのやりたいことを支えることがHMの仕事です」という。留学生は、一人ひとりが島でチャレンジしたいことを実現する「100の約束」に取り組む。例えば「ツリーハウスを作りたい」という思いがあれば、HMとともに地域の協力を得ながら、場

所や材料を探しつつ制作する(現在作成中)。なるべく子どもの自発性にあわせてスピードで寄り添うフォローが心掛けられている。

チームは留学生の募集業務も担う。2023年度は10回以上説明会を実施し、その後はオンライン面談、短期体験、一次選考、二次選考とそのプロセスは長い。そこにはミスマッチを防ぎ、「一度受け入れた以上しっかりとみていきたい」という思いが込められている。



働きながら学べる 小さな島の定時制高校

北海道の北西部、日本海に浮かぶ天売島は約270人が暮らす島。小規模離島ながら高校があり、北海道内はもちろん全国からの留学生を受け入れている。全校生徒

は17人(2023年度)。皆が寮や下宿等で共同生活を行いながら学校に通っている。

特徴は定時制であること。生徒たちの大半が日中は漁協や旅館な

どで働き、夕方になると学校で勉学に励む。人手が限られる小さな島にとって、天売高校の生徒は頼もしい。地元の漁師からも「あの子どもがいないと島の漁業が成り立たないよ」と言われるほど、社会を支える一人として必要とされているのだ。

「自分で稼ぐ力を身につけたい」と自ら志望してやってくる留学生も多く、なかには寮費や学費を自ら稼ぐ生徒も。卒業後は就職も大学進学も可能で、実践で役立つ資格・検定取得に向けた個別指導も充実。卒業後にそのまま島の漁師となる生徒もいる。高校のキャッチフレーズは「生徒全員主人公」。島の小中学校や地域の人々と連携して行われる年中行事も多く、島を支える大切なひとりとして生きる経験も積み上がっていく。高校時代の3年間で、学業と島暮らし、リアルな職業経験を積むことができるのが天売高校の魅力だ。



①生徒は漁業を中心に島内各所で活躍している②天売高校の姿は2022年にNHKドラマ「春の翼」でも描かれた③寮の予定表には学校、仕事、部活のほか「釣り」なども



島の子どもたちが減り続ける現状についてどう思いますか？

いま、奥尻島では高校生は島留学制度で、60人程度入っていますが、とにかく産まれてこない。産み育てたくても、幼稚園はあるけれど保育所がないので、3歳未満の子を預けて仕事しなくてもできないし、そういう若い人すら入ってこない状況。役場職員で移住者が増えてきているので、そういう方々に期待しています。(よーよーよー)

昔は離島と本土では情報格差など色々な格差があったと思いますが、今は大幅に解消されていると思います。離島ライフの魅力を積極的に発信して周知することが、子どもの数の減少に歯止めをかける対策になるでしょう。ただ、島に移住すると、子どもが離島で得られる特別な経験と引き換えに、本土で得られるはずだった経験が限定的になります。親としては不安を感じるでしょう。何か良い手段がないものかと思います。(海辺野夏雲)

日本全体がシュリンクしているのに離島だけを止めることは難しい。出産ができない(手術や輸血、入院など)医療も脆弱だし、高校から大学に進むには島を必ず出なければならぬ環境は昭和からずっと変わっていない。(カンパチ)

島に戻っても不便だし仕事もないから仕方ない。(hi)

厳しい離島での生活ですから減るのも分かります。大人が住まない。特に官庁や企業が住もうとしないのですから、子どもも推して知るべしでしょう。離島防衛などと言うなら公務員が率先して住むべきではないかと。(サリー)

奥尻高校が行っている島留学制度はとても良いと思います。1期生を祖母の民宿で3年間お預かりしていました。生徒同士も良い刺激になり、地域の方々もこれまで以上に高校に興味関心を持っていただけるようになったと思います。このような活動はこれから必須になってくると思われます。また、これからは高校卒業後も島に残れる環境を整え、島で働ける環境をつくっていくことも必要だと感じております。(詠りが抜けない離島の野生児)

生活水準の上昇に伴い、教育環境や所得の向上が最優先されるようになり、制約の多い島しよ部から都市部に親世代が流出したのだと思う。島の就業環境が向上すれば流出の抑制につながるが、交通・流通などの制約が多いことが企業進出のハードルになっている(悪循環)。(たまさん)

どう考える？子どもが減りゆく島とその未来

島は「人が育つ環境」として大きな可能性を秘めています。しかしながら、子どもたちの数は急激に減少し、2010年から現在までに2万人近くが減少しています。この現状をどう捉え、どう切り拓いていくのか。リトケイ読者の意見を紹介します。



子どもの減少問題について具体的な方法を考えたり実行していることはありますか？

実子に島外で無理をさせずに「いつでも帰ってきて仕事したらいい」「休憩したらいいじゃないか」と伝え、島外の子どもたちを受け入れる交流事業に取り組んでいる団体を応援している。(未来へ)

島からでも、中学受験ができることを実践してみたくて、我が子に勉強を教えています。一人目は、この春、塾なしで公立中高一貫校へ進学しました。(かずえ)

子育て移住の促進のため、ファミサポに代わる制度として子育てシェアアプリを推進する団体を結成したり、フリースクールを開校したり、子育て中でも働きやすくなるように、働き方の多様化を島内の企業に推進したりしています。(瀬戸猫なみ)

町内会の大人が協議会を立ち上げ、有志でNPO法人を設立。子どもたちが夜間に運動できる機会を創出したり、地域おこし協力隊の方々も協働したりしています。(カメ)

産婦人科医として、安心して妊娠、出産できることが人口減少や出生率の低下に影響していると思うので、島に持続可能な周産期、産後ケアなどの提供ができないか考えている。(ことく)

地域にある県立高校の島留学を応援している。(うりぼう)

「島の子育ての良さ」を相対化する。(もきち)

自宅の一部を無料で泊まれる部屋として提供。島外の人が島の暮らしを体験し、レポート(関係人口創出)につながるか実験している。中長期滞在用のシェアハウスも準備中。移住や二拠点居住の初期費用を減らし、ハードルを下げる狙い。(いしおのヨメ)

子育てと教育の課題を解決しないと子育て世帯が定着しないと考え、子育て支援と小学生の体験機会を創出するための団体(一般社団法人キッズポート)をつくって、施設運営をしている。まだまだこれからですが。(さえ)

特に自分が主体という訳ではないが、小さいころから島に連れて行き、環境の違いを楽しませるようにしている。関わりしるを増やす、接点を増やして関心を持たせるということは大切だと感じる。そこから選択肢として離島留学のようなものも浮かんでくるのではないかと。(babayoh)

子どもの学びと地域の未来のために

学校を支える工夫

子どもが育つ環境には学校が不可欠で、魅力的な学校を求めたいものです。しかし、地域外から赴任してくる先生が集まる島の学校には特有の問題も。そこで「学校を支える工夫」を取り入れる事例を紹介します。

子どもたちの学びを担う先生の「島を知らない」問題

より良い「シマ育」づくりのため考えたいことのひとつに、子どもたちの学びを担う先生や学校に関する問題がある。離島地域の公立学校で教壇に立つのは、1〜3年の任期で島外から赴任してくる先生がほとんど。それゆえリトケイ読者の声を集めると、島が好きで、島の学校を志望してやってくる先生がいる一方、「島をネガティブに思っている先生もいる」「先生の声が子どもたちに直接影響してしまう」などの問題が、少なからずあがってくる。

屋久島で生まれ育ち、特定非営利活動法人HUB&LABO Yakushima(以下、HL)で環境教育や親子の自然体験を推し進める福元豪士さんもそのひとり。「学校の先生は人材育成をするけれど、学校の先生は島のことを知らない」という問題に対して「先生の人材育成をする」役割を担っている。

「屋久島町には僕を含めて6人の屋久島型ESDアドバイザーがいます。学校から相談があったら答えるシステムで、総合学習の年間プロ



グラムについての相談に乗ったりしています(福元さん)。

持続可能性を追求する大人が持続可能な教育のハブに

ESD(Education for Sustainable Development)の略で「持続可能な開発のための教育」と訳される。福元さんからESDアドバイザーが、学校と地域社会をつなぐハブとなり、持続可能な社会をつくる人材を育む教育づくりをサポートしているのだ。

例えば、社会科の授業なら教科書に載る事例だけでなく、足元にある島の経済産業を学ぶことがESDとなる。しかし、赴任してきた先生だけではキーマンとつながることができないため、ESDアドバイザーが「こういう人がいますよ」と地域につなぐ。

HLには、福元さんから子育て世代の島出身者と移住者がいて、日頃から親子向けの自然体験プログラム(OYAKO LABO)や、非認知的能力を伸ばす放課後の場づくり「島子屋」、島の住民と未来を語る「屋久島未来ミーティング」などを企画している。地域の未来を追求するキーマンと学校が連携することで、短期間で入れ替わってしまう先生の問題を越え、島への愛着や誇りを醸成できる公教育が叶えられるのだ。

長期的な教育魅力化に向けた学校経営補佐官という一手

「高校魅力化プロジェクト」により統廃合の危機からV字回復を果たし、人気校となった島根県海士町の県立隠岐島前高校では、2019年に日本初となる「学校経営補佐官」というポジションが設置された。

初代学校経営補佐官のひとり大野佳祐さんは「学校と地域とが一緒に魅力で持続可能な地域と学校をつくる」というビジョンを掲げながら

も、短期間で入れ替わってしまう学校長や先生だけでは、持続可能な学校経営が叶えられないことを課題と考えていた。「島根県の県立高校は、異動のルールにより学校長であっても任期は長く3年。すぐに入れ替わってしまう学校長や先生だけでは「魅力的な学校」にすることはできても、「持続可能なものにする」という視点がなかなか持てなかつたんです(大野さん)。

「高校魅力化プロジェクト」は現在、海士町・西ノ島町・知夫村からなる隠岐島前全体の教育魅力化としてアップデートされ、その対象も高校から地域全体へと広げられている。構想のベースにある「隠岐島前教育魅力化構想」は、島前高校の全校生徒と全教職員、地域住民、有識者、OB・OGが描く「ビジョン」から策定した「みんなの夢」の結晶ともいえる。

「運営」ではなく「経営」学校長の意志決定を支援

学校経営補佐官には「経営」の2文字が付く。2名が配置された補佐官のうち1人は、株式会社リクルートキャリア初代代表取締役社長を務めた水谷智之さんが担当。公立学校では決められ



た予算のなかでやりくりをする「運営」スタイルが一般的だが、島前高校の魅力化は島前3町村が予算をひっぱり出し、魅力化のための経営ができたから実現できたと言水谷さんは考える。

持続的な地域づくりには魅力ある教育環境が必要。そのためには、長期的な視点で学校経営に携わりながら、学校長の意志決定をサポートできる外部人材も必要。大野さんは学校経営補佐官の仕事で「地域、社会、世界と学校とをつなぐコーディネーターとしての役割はもちろんなこと、町を、国を、世界を巻き込みながら、学校の経営陣と一緒に経営資源を集め、勇気ある意志決定の一助となること」と考える。

島前3島には近年、15年前に高校魅力化がスタートした当時、高校生だった若者たちが社会を支える一員となり戻ってきている。教育魅力化はまさに「子どもたちが帰ってくる島」をつくる取り組み。学校を支えることが持続可能な地域づくりに直結することを、隠岐諸島の事例は示している。

リトケイ読者と行ってきました！ シマ育モニターツアー in 佐渡島

11月3日からの2泊3日、離島留学に興味関心を持つリトケイ読者と共に、佐渡島に行ってきました。3家族が体験したシマ育とは？案内役・高橋がレポートします。



読者の皆さんこんにちは。この度、シマ育に興味がある方に、実際の島での子育て環境や暮らしを体験してもらうシマ育モニターツアーを開催しました。ツアーに参加したのは7歳から9歳のお子さんを含む3組のご家族。リトケイ上で募集した離島留学に興味関心のある親子向けヒアリングにご協力いただいた30組より選ばれた皆さんです。11月3日、関西や関東から新潟港に集合いただき、いざ佐渡島へ。



子どもたちが楽しんでいたのは自然のなかでの「猛ダシシュ」!

初日は島の中心市街地を拠点に、まずは佐渡UIターンサポートセンターで島の暮らしについて学びます。子どもたちは、島に到着してすぐにトキを発見して大よこび。世界農業遺産に登録される豊かな自然のなか、生き物を見つけてはよこび、野っ原があれば猛ダシシュ。親御さんが「普段、学校ではおとなしいといわれているんですが」とおっしゃるのが信じられないほど、伸びのびと島を楽しんでいました。

2日目は、佐渡のシマ育環境を知るべく、子どもや親が気軽に集える居場所としてつくられた「たまりば・子ども未来舎りぜむ」で地元のお母さん方とランチを楽しみ、病院やスーパーも訪問。いずれも離島留学することになった時にはお世



「りぜむ」は不登校の子どもを受皿にもなっている子育て拠点



人口約4.9万人の佐渡島には小児科のある総合病院もあります

話になるかもしれない場所ばかりで、島の子どもはどんな様子で暮らしているのか？小児科の先生はどんな方が??スーパーではどんなものが買えるのか?皆さん興味津々でした。

さて、そんなツアー最大の目玉は、佐渡島北部で離島留学生を募集している内海府小学校の学校体験です。2日目は両津港から車で約40分の内海府地域に泊まり、離島留学の先輩家族や地元の方々との交流を楽しみました。

3日目はいよいよ内海府小中学校の文化祭・説明会へ。文化祭では子どもたちや保護者による出し物が盛りだくさん。ランチでは、地元のお母さんによる魚さばき体験も。午後は学校の説明を聞きながら地元

や学校のキーマンともたっぴり交流しながら、佐渡島のシマ育を体験いただきました。

そう、このツアーの良さは、観光目線ではなくシマ育目線で島を体験できること。もともと離島留学に興味関心のあるリトケイ読者家族ともあって、帰る頃には子ども親もすっかり仲良しに。共により良い子育て環境を探る仲間同士、島という子育て環境につながるきっかけを得ていただいた3日間となりました。



初めての魚さばき体験も楽しんでいただきました



スーパーにはトキが目印の牛乳も



内海府小学校では郷土芸能や劇などを見学

みんなで育む、子どもとシマのよりよい未来 続きは『シマ育コミュニティ』へ



この国で育つ子どもたちは誰もが皆、どこかの島や地域を支え、島国を支える大切なひとりで成長していきます。一人ひとりが健やかに育ち、心豊かに生きていけるよう、「シマ」という育みの空間をより良くしていけるよう、2023年9月にNPOリトケイは日本財団と連携し、ウェブサイト「シマ育コミュニティ」をオープンしました。

「シマ育コミュニティ」は、子育て・教育環境情報に特化したリトケイの姉妹メディアです。シマ育を魅力化するためのヒントや、子育て移住や離島留学の募集情報、保育士や先生の募集などを、「シマ(人々が互いに支え合える地域共生コミュニティ)」単位で

お届け。多様な人と関わり自然と文化に触れながら人間力を育むシマが増え、シマでますます育つ子どもたちと、親と、地域の笑顔が増えるよう、みんなで「シマ育」を育てていきましょう?

登録無料の会員サイトでは、日本各地のシマ育情報や、シマ育を支える人や有識者のインタビューの閲覧、オンライン勉強会のアーカイブ動画視聴などが可能です。ぜひご登録ください。

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION 「シマ育コミュニティ」は日本財団の助成金を受けて実施する「子どもと親が生きる力を育む離島・過疎地域の育み場」しまいく事業の一環として特定非営利活動法人離島経済新聞社が運営しています

シマ育に関する記事や勉強会のアーカイブ動画も公開

「シマ育コミュニティ」上では、「シマ育」に関するオリジナル記事や、本特集に掲載した記事のロングバージョン、シマ育勉強会のアーカイブ動画を公開しています。

<ロングバージョン記事>

- 島で愛された経験があれば頑張れる。佐賀・高島で教わった「察母の哲学」【シマ育のしくみ】三重県・鳥羽市(答志島)の小学校留学【シマ育取材日記】十島村で見た「通船作業」ほか

<シマ育勉強会アーカイブ動画>

- vol.1 離島留学の基本と佐渡島・松ヶ崎 & 内海府のリアルな子育て環境(佐渡島)
- vol.2 みんなでつくる子どもの居場所づくり& 答志島の子育て環境(答志島)
- vol.3 子ども大人も集まれ!地域力を育む島のコミュニティ図書館(海士町)
- vol.4 “人”が育つ環境としての“島”が持つ可能性(汐見稔幸先生 & 中能孝則先生)

シマ育応援団を大募集!

リトケイでは、島という子育て教育環境の可能性と、日本の子育て問題をハイブリットに解決していく「シマ育」を広げていけるよう、「シマ育応援団」になってくださる個人・法人を募集しています。

当プロジェクトの活動費は、子どもたちを取り巻く社会課題を解決することを目的とした日本財団の「子どもサポートプロジェクト」の採択事業への助成と、リトケイのサポーター会員および寄付者の皆さまからのご支援によってまかなわれています。この取り組みを継続・発展できるよう、応援団になっていただけませんか?

どなたでもご支援いただける寄付・サポーターメニューや、法人向けの協賛メニューの詳細はNPOリトケイまで。

親子を受け入れたい島の皆さんへ リトケイが募集をお手伝いします!

子育て移住や離島留学に関する情報を発信いただけます。UIターン先や離島留学先を探すリトケイ読者に向けて、情報を届けませんか?無料で情報掲載いただけるメニューに加え、リトケイスタッフが全力サポートする体験ツアーやモニターツアーもご用意しています。詳細はリトケイ編集部までお問い合わせください。



シマ育



シマ育 応援



シマ育 お問い合わせ

「シマ育」を深める

シマ育 Books

子育て教育環境を魅力化するための具体策や、魅力化の先に起こることなど、より深く「シマ育」を知り、考えるためのおすすめ図書を紹介します。

- 1 教えて! 汐見先生マンガでわかる「保育の今、これから」 著・汐見稔幸 Cakken
- 2 森のようちえん冒険学校 自然体験で生きる意欲と賢さ 著・中能孝則 Kフリーダム
- 3 アロマザリングの島の子どもたち 多良間島子別れフィールドノート 著・根ヶ山光一 新理社
- 4 未来を変えた島の学校 著・山内道雄 岩波書店
- 5 教育の島発 高校魅力化&島の仕事図鑑 編著・高校魅力化プロジェクト 大崎海星堂 学事出版
- 6 村を育てる学力 著・東井義雄 明治図書
- 7 子育て支援が日本を救う 政策効果の統計分析 著・柴田悠 勁草書房

①②では特集冒頭に登場した汐見稔幸先生と中能孝則先生が、幼児期の自然体験や非認知的能力を高める保育環境のつくり方などを具体的に紹介。③では中能先生が幼少期に体験した瓶島の風景もみることが出来ます。④は10ページ登場の根ヶ山光一先生が、沖縄・多良間島に4カ月間滞在しながら、島の子育て文化をみつめた記録。その価値が示される「シマ育」の真髄がみえる一冊です。「高校魅力化」により島の未来が変化した海士町(島根県)と大崎上島(広島県)の軌跡を知るには、④⑤がおすすめ。1957年に初版が発行された⑥は、教育が地域づくりにもたらす影響や、教育者の在り方を解いた一冊として今もなお読み継がれる名著です。⑦は子育て・教育の支援施策が、結果として日本そのものを救うことにつながることを統計分析によって明らかにした一冊。シマ育をより良くしていくためのエビデンス(裏付け)として備えておきたいバイブルです。